

自然に学び 自然を守る



**クミカ**

# 第五回 クミアイ化学工業(株)

## 学生懸賞論文

# 優秀賞受賞論文

**農業で学び、農業を学び、農業が変える  
—“農ク”を軸にした農業高校の再興—**

神戸大学 農学部  
資源生命科学科 4年  
藤田このむ

## 要旨

本稿はまず、現代の日本人の食意識が「食育」という言葉をキーワードに向上していることを示す。しかしそのような中で、農業高校が上手く社会の中で機能していないことを指摘する。そこで、筆者が見てきた農業クラブ（通称農ク）全国大会を農業高校生だけのものにするのではなく、一般人も見たくなるようなエンターテイメント性を持たせたものにするプランを提示する。農ク全国大会を軸として、農業高校の再興並びに地域活性を期待する提案を行う。

現代の日本人の食への意識は高まりつつあり、特に中学生までの子どもへの取り組みは多く行われている。しかし、肝心の担い手という面での変化はあまり見られず、このままでは安定した国内の食料供給が危ぶまれているというのが日本の食と農業の現状である。

農業高校は、第一に将来のスペシャリストの育成、第二は将来の地域産業を担う人材の育成、第三は人間性豊かな職業人の育成を目指し、圃場での実習時間をとても多く含んだカリキュラムになっている。農クの全国大会は、農業高校生にとって自分たちの学んだことを発揮し、競い合うことができる「農業高校の甲子園」である。

農業高校は現在、掲げている目標やなされている授業は充実していると考えられるが、肝心の生徒が「高校 3 年間だけ仕方なく農業高校に来ている」というモチベーションで入学し、就農したいという意志の変化まではもたせていない現状である。筆者はそもそも農業高校の学習内容の認知度が低いことが問題だと考えた。一般への認知度が上がり、農業高校でどのようなことが学ばれているか、普通科との違いは何で、将来どのような職業につながるのかがイメージとして瞬時に浮かぶようになれば、農業職を志して入学を志願する生徒が増えるのではないだろうか。今回は農業クラブ全国大会の一般への認知化への以下の 3 点の提案を行う。

- (1) 47 都道府県から 1 校ずつの代表制にする
- (2) 農業高校生による購入契約会の実施
- (3) 審査員の充実

全国の高校生が集い、日本一という称号を目指して地元を引き下げて競い合う。そこには日本というつながりがあり、規模の大きさがもたらす影響力がある。

農ク全国大会のエンターテイメント化。これを目標に、農ク全国大会の改善を行うことで、より多くの人々がこの大会を訪れて、発表を見たくなり、そして応援したくなるような大会になることが期待される。農ク全国大会のエンターテイメント化がもたらす期待は以下の 3 点である。

- (1) 地域活性化
- (2) 農業高校の変化
- (3) 子どもにとっての進路選択肢の増加

本来は農業を教え、農業で人を育て、農業を担っていくというのが農業高校のあるべき姿である。農クの全国大会をより夢のあるものにして、農業高校生や子どもたちが目指すべき場にするすることで、農業教育は再び本来のあり方へと導かれるだろう。

筆者は将来、農業を学び実践することが、多くの人にとっての選択肢として存在するような教育現場を作りたい。農業で学び、農業を学び、農業が変えるのだ。

はじめに

### 『農業高校の甲子園』

この言葉に反応する人が一体どれほどいるのだろうか。世の中には10代の学生が主役になる大会が多くある。高校球児は甲子園を目指し、工業高等専門学校に通う者にはロボコンがある。NHK合唱コンクールは人気歌手の楽曲提供が近年の主流だ。甲子園もロボコンも合唱コンクールも、今となっては学生だけのものではない。テレビ放送で手に汗を握りながら母校や地元の高校を応援する多くの人、若かったころを思い出して自分のことのように応援する人。当事者たち以外の人の心を動かすこれらの大会は規模も認知度も抜群に高い。そして、小さな子どもや受験生たちはすこし年上の学生の輝く姿を見て、そこを目指すのである。

筆者は農業科の教員免許を取るために、この夏、農業科教育論という集中講義を受けた。農業科の特徴を講義で聞いたり、模擬授業を行ったりする。そして最終日には兵庫県内にある農業高校2校を見学させていただいた。筆者は普通科の高校を卒業しているので、農業科の高校生活を知らない。しかし、見学していくうちに農業科の高校生活は筆者が送ったそれとは大きく異なるものだということが分かってきた。大きな圃場にはその地域の特産物や稲、野菜が栽培されている。畜舎には牛や豚が飼育されていて、高校生は手慣れた様子で餌やりをしていた。職員室の前には地元の新聞に取り上げられた記事が数多く掲載されている。地元企業との共同プロジェクト、幼稚園・小学校との交流、地域での販売会の様子など、さまざまな人と交流している様子が垣間見えた。

高校見学の際に、あるポスターを見つけた。「農業クラブ全国大会」と書かれてある。先生に尋ねてみるとこの大会は「農業高校の甲子園」とも呼ばれていて、各ブロックを勝ち抜いた全国の農業高校生が発表やスピーチを行うものだという。「大学生も顔負けの内容を堂々と発表しているから是非行っておいで。」と勧められた。筆者は早速足を運び、トップクラスの農業高校生の発表を見てきたのだ。

長野の新しい品種のお米の売り出しや、青森で固有種になっている毛豆の保護作戦、北海道メロンのブランディング戦略など、地域性にあふれた発表を10分という制限時間をフルに使って発表する。その後の質疑応答では、鋭い質問に言葉が詰まってしまう高校生や、一生懸命に答える姿が印象的だった。審査結果は翌日の式典で発表され、緊張に包まれた中で全国の農業高校生のトップが発表された。そこには1年間あるいはそれ以上の時間をかけてきたすべてが詰まっており、見ている者さえも感動させた。

本稿はまず、現代の日本人の食意識が「食育」という言葉をキーワードに向上していることを示す。しかしそのような中で、農業高校が上手く社会の中で機能していないことを指摘する。そこで、筆者が見てきた農業クラブ（通称農ク）全国大会を農業高校生だけのものにするのではなく、一般人も見たくなるようなエンターテインメント性を持たせたものにするプランを提示する。農ク全国大会を軸として、農業高校の再興並びに地域活性を期待する提案を行う。

## 1章 日本の食と農業の現状

### (1) 世間の「食」への意識

「食育」という言葉が浸透している昨今。平成17年に食育基本法が制定された現代の日

本では、様々な経験を通して「食」に関する知識と、「食」を選択する力を習得することが求められている。平成 23 年 3 月に策定された第二次食育推進基本計画によると、今後の食育の推進において、単なる周知に止まらず国民が「食料生産から消費に至るまでの食に関する様々な体験活動を行うとともに、自ら食育の推進のための活動を実践することにより、食に関する理解を深めること」（食育基本法第 6 条）を旨としている。

さらに食育基本法は特にこどもへの食育の重要性を説いている。前文には以下のような記述がある。

もとより食育はあらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである。（食育基本法前文より引用）

そこで政府は子どもを対象としたさまざまな取り組みを行ってきた。農林水産省・文部科学省・総務省の連携の下「子ども農山漁村交流プロジェクト」は平成 20 年から開始している。平成 24 年度までに 43 都道府県 141 の受け入れモデル地域を中心にした、全国の受け入れ地域によって一定期間の宿泊体験活動が、農村漁村で子どもを対象にして行われている。

「教育ファーム」での取り組みも盛んである。これは、教育機関（小学校・中学校・幼稚園・保育園）や農業漁業者等が主体となり開設した農場において一連の農作業の体験を提供する取り組みである。農林水産省が全国市町村を対象に行った調査によると、平成 22 年度において全市区町村のうち「市区町村内に教育ファームの取り組みを行っている主体がある」と答えた市区町村の割合は 8 割を占めている。

内閣府が行った「食料・農業・農村の役割に関する世論調査」によると、20 歳以上の成人が考える農業体験の意義は図 1 の通りである。半数以上の人々が、農業体験を通して食への興味や、食物生産の過程の理解、学校や家庭では得られない貴重な体験を期待している。このような効果を期待する人が増えているということは社会の風潮として「食育」が正しく認知されており、求められる形で食育の推進が行われているということである。食育活動の効果は出てきていると言って良い。

## （2）農業の厳しい現状

一方で、農業の担い手不足問題は依然として深刻である。図 2 は農林水産省が発表した基幹的農業従事者数等である。農業従事者数は減少の一途をたどっており、平均年齢も上がっていく一方である。今後、高齢農業者のリタイアは増加すると見込まれる。荒廃農地や後継者のいない農家の農地について、担い手による有効活用を図るとともに、青年層の新規就農者を確保し、定着を促進することが課題となっている。

食への意識は高まりつつあり、特に中学生までの子どもへの取り組みは多く行われている。しかし、肝心の担い手という面での変化はあまり見られず、このままでは安定した国内の食料供給が危ぶまれているというのが日本の食と農業の現状である。

## 2 章 農業高校の現状

### （1）農業高校(農業科)とは

農業高校には農業科のみが設置された単独校と、普通科などが併設された併設校の 2 種類がある。文部科学省によると、平成 27 年 5 月現在、単独校は 127 校、単独校を含めた農業科を置く学校数は 309 校である。これは、高等学校の 2.7%を占める。

平成 22 年 10 月に発表された文部科学省の高等学校学習指導要領解説（農業編）によると、農業科は以下の三つの視点を基本としている。

『第一は将来のスペシャリストの育成に必要な専門性の基礎・基本を一層重視し、専門分野に関する基礎的・基本的な知識、技術及び技能の定着を図るとともに、ものづくりなどの体験的学習を通して実践力を育成する。（中略）

第二は将来の地域産業を担う人材の育成という観点から、（中略）地域産業や地域社会への理解と貢献の意識を高めさせる。

第三は、人間性豊かな職業人の育成という観点から、（中略）職業人として必要な人間性を養うとともに、生命・自然・ものを大切にする心、規範意識、倫理観等を育成する。（以上、高等学校学習指導要領解説（農業編）より抜粋）』

これらの基本方針の下、農業科では 30 科目が設定されている。科目の例としては、作物・農業機械・食品化学・農業経済・動物バイオテクノロジー・測量などがあり、多岐にわたる。多くの高校は農業科の中でも作物系、畜産系、土木系、生物工学系などのコース・科に分かれているので、30 科目すべてを履修するわけではない。

農業高校の特徴の一つとして圃場での実習がある。学習指導要領にも実験・実習については明記されている。

『農業に関する各学科においては、原則として農業に関する科目に配当する総授業時数の 10 分の 5 以上を実験・実習に配当すること。（以上学習指導要領より引用）』つまり、農業科目の半分以上は実習ということになる。3 年生にもなると農業科目が半分以上を占める農業科では実習は毎日、曜日によっては複数時間設定されているということになる。

## （2）農業クラブ（農ク）とは

農業科には学校農業クラブというものがある。これは 1948 年に農業高校生の自主的・自発的な組織として誕生した。農業科の生徒は入学時に自動的にクラブ員になる。活動内容としては、国際交流・環境調査といったものもあるが、日々のプロジェクト活動が主である。これは各専門分野の研究であり、科目の枠を取り払った横断的な学習が行われる。プロジェクト活動は放課後や長期休暇を利用して行われ、授業の内容をより深く理解する手立てになっている。

そして、これらの活動の成果を発表する場として、冒頭で述べた日本学校農業クラブ連盟全国大会がある。知識・技術の競い合いと同時にクラブ員相互の交流が主な目的で、会場は毎年異なる。全国大会では年によって若干異なるが、プロジェクト発表会・意見発表会・平板測量競技・農業鑑定競技などが行われる。

プロジェクト発表は日頃のプロジェクト活動の成果をパソコンとプロジェクターなどの視聴覚機器を使って発表する。発表は 10 分以内とされ、個人またはグループで行われる。

3 つの部門（①食料・生産・流通、②環境・ヒューマンサービス、③文化・生活）に分かれ、各ブロック代表の 9 校が各部門で発表する。

意見発表会はクラブ員の身近な課題や将来の抱負について 7 分間の原稿にまとめ、発表する。発表者にとっては、いかに自分の気持ちと発表内容を聴衆に理解してもらうことができるかも重要な要素となる。プロジェクト発表と同じく 3 部門に分かれ各ブロック代表が発表を行う。

その他にも、測量の正確さを競う平板測量競技会や農業に関する知識・技術の成果を、鑑定・判定・診断等においてその実力を競い合う農業鑑定競技が行われる。発表は審査員によって審査され、日本一の農業高校や農業高校生が決定される。

農クの全国大会は、農業高校生にとって自分たちの学んだことを発揮し、競い合うことができる「農業高校の甲子園」なのである。

### 3 章 農業高校の問題点

国民の食への意識は高まりを見せ、農業高校の内容も充実している。しかし、農業高校にはいくつかの問題点があり、その影響で本来期待されている効果が得られていないという現状がある。

#### (1) 就職先が学んだこととつながっていない

まず、農業科の進路について見ていく。図 3 を見てもらいたい。これは文部科学省の学校基本調査による高校学科別卒業者に占める就職者の割合を示している。ここからも明らかだが、職業高校の就職率は普通科とは全く異なる。普通科はこの 20 年で徐々に就職率が減少しており、現在は 1 割を切った。一方で職業高校 3 種（農業・工業・商業）は高い就職率を示す。ここ 20 年、就職率は工業高校、農業高校、商業高校の順で、推移している。これは、各種高校の指導方針や、在籍する生徒の考えなどが変わっていないことを表していると考えられる。

次に図 4 の農業科の生徒の産業別就職先を見ていく。この図は農業科の生徒の中で、就職をした生徒が、どのような産業の職についたかの割合を示している。最も多いのは、製造業で少なくとも 3 割、多い時は 5 割近くが製造業を選んでいる。製造業に次いで建設業、卸売業・小売業も 1 割～2 割で推移している。農林業は 5% のラインからほぼ変化することなく、この 20 年推移していることが分かる。

農業高校生は、授業の半分を農業科目で受けておきながら、就職先で全く別の業種を選び働いているのだ。この要因として考えられるのは、農林業を志して入学してきた生徒が少ないことが挙げられる。農業高校は公立高校の中でも偏差値が低いところが多く、私学でなく公立高校にさえ進学できればいいと考えている生徒の数は一定数いるようだ。3 年間の勉強を経て、農林業の職に就こうと決意するに至る生徒は増えていないというのが現状である。

#### (2) 農業高校の数が減っている

図 5 を見てもらうと分かるのだが、高等学校の全学科に占める農業科の割合は減少の一途をたどっている。このままだと、さらに減少傾向は続くと考えられる。

この要因として考えられるのは、農業高校の立地である。林業科は実習林があるため山間部に立地する。また、農業科は広大な圃場を持っていることが多いため、都市部ではなく山間部などに立地することが多い。このようなところでは、過疎化が進み子どもの人口が減っている。これが学科数の縮小につながっていると考えられる。農業の担い手は増や

していかなければならない状況であるが、過疎化が農業高校の縮小に拍車をかけ、担い手の候補者ともなる人材を取りこぼしてしまっているのが現状である。今のままでは負のスパイラルが続き、状況の改善は見込めないと考えられる。

### (3) 農業クラブ全国大会の知名度が低い

農ク全国大会の一般の認知度はかなり低いと思われる。観客も農業高校関係者や生徒の親ばかりで、甲子園や合唱コンクールのように学校関係者以外の観覧者はほとんどいなかった。Ustream 配信や地元新聞で取り上げられることはあるのだが、その配信や記事を読む人も関係者に限られている。内容はとても高度で聞きごたえのあるものが多く、是非一般人にも聞いてもらいたいのだが、現状では農業クラブ員のための農業クラブ全国大会という形になってしまっている。内輪で終わらせてしまっていて、全国大会を開催しているのに影響力は乏しいのである。

## 4章 提案

3章で挙げた問題点を解決するための提案を行う。農業高校は現在、掲げている目標やなされている授業は充実していると考えられるが、肝心の生徒が「高校3年間だけ仕方なく農業高校に来ている」というモチベーションで入学し、就農したいという意志の変化まではもたせていない現状である。筆者はそもそも農業高校の学習内容の認知度が低いことが問題だと考えた。一般への認知度が上がり、農業高校でどのようなことが学ばれているか、普通科との違いは何で、将来どのような職業につながるのかがイメージとして瞬時に浮かぶようになれば、農業職を志して入学を志願する生徒が増えるのではないだろうか。今回は農業クラブ全国大会の一般への認知化への提案を行う。

### (1) 47都道府県から1校ずつの代表制にする

現在は県のコンクールから選出された高校、生徒がブロック大会に進み、各ブロックから代表1校（もしくは生徒）が選ばれる形になっている。しかし、この大会をより大規模に、そして盛り上げるために47都道府県から1校ずつの代表制をとることを提案する。農業高校は2章で述べたように地域産業や地域社会への貢献という役割を担っている。これを体現するためにも各都道府県から代表校が出ることで、全国に各地域の素晴らしさや特性を発信できると考える。

また、各都道府県から発表されることで、一般の人は応援がしやすくメディアも取り上げやすくなると考えられる。そして、全国大会への出場校が増えることで、日本全体の農業レベルの底上げにつながると考えられる。

### (2) 農業高校生による購入契約会の実施

プロジェクト発表では販路の開拓を課題に出しているところが多かったので、全国大会を販路拡大の場にすることを提案する。農産物なので、それぞれ商品の販売時期は異なり、必ずしも全国大会の開催時期が被るわけではない。そのため、購入契約をできるブースを高校ごとに設置するのである。一般の人がプロジェクト発表を聞いて、その商品を買いたいと思えば、購入契約をできるようにするというものだ。ネットのURLをまとめて掲載するだけでも購入契約は可能である。しかし、ブースで対面形式を取りながら商品の販売活動を行うことで、高校生にとっては栽培から販売までの一連の動きの勉強になり、購入者にとっては農業高校生を身近な存在である認識させる効果が期待できる。注目を集めた発

表は販路拡大のチャンスをつとめているということである。高校生にとっても一気に全国の顧客を手に入れるチャンスなので、プロジェクト発表のモチベーションアップにつながる。聴衆にとっても、実際に購入までできる発表会ということで、聞いて終わりではない楽しみのある大会になると考えられる。

### (3) 審査員の充実

現在の農業クラブ全国大会は審査員 7 人程度が審査している。審査員は農業高校の教員もしくは校長先生がほとんどで、1・2名の大学の教授、農業大学の先生が参加している。質疑応答は1,2回しか行われておらず、発表者の一方的な発表で終わっている感が残った。これをより一般の感覚に近づけていくために、審査員を他業界からも呼んでくるのである。経済系の専門家や食品メーカー、外食産業、あるいは年の近い現役農学部生など、審査員の数を増やし、バラエティに富んだ多角的な審査ができるような体制を整えるのである。そして、質疑応答を増やし、聴衆の疑問を代弁し、発表者が解決していけるような発表にすれば、一般の人でも聞きやすくなる。他業界からの審査員の充実は研究に深みを持たせ、今後の研究の指針を見つける手立てにもなる。

## 5章 期待

全国の高中生が集い、日本一という称号を目指して地元を引き下げて競い合う。そこには日本というつながりがあり、規模の大きさがもたらす影響力がある。

農ク全国大会のエンターテイメント化。これを目標に、前章のような農ク全国大会の改善を行うことで、より多くの人々がこの大会を訪れて、発表を見たくなり、そして応援したくなるような大会になることが期待される。農ク全国大会のエンターテイメント化がもたらす期待は以下の3点である。

### (1) 地域活性化

その地域の農産物を効率的な栽培方法や、新しい栽培法などで販売まで行った一連の流れを発表していくのがプロジェクト発表の主流である。地域特産の農産物を発表していくことで、それを買いたいと思う聴衆者が増えれば、地域農業の活性化が期待できる。

発表が高評価を得れば農業が復活するかもしれないというところに期待をかけるのは、高校生だけではないはずだ。地元の農家、企業が一丸となって全国で特産の農産物を売りだすモデルがここには存在する。産業が再び発展すれば農業労働人口も増える。そして安定した農業の実現も期待できる。過疎化の恐れも食い止めることができ、農業科の縮小の動きにもブレーキがかかるのではないか。農業高校がその地域の軸となり、地域の活性化に一役買うことが期待されるのである。

### (2) 農業高校の変化

農ク全国大会を軸として、一般の認識を変えていくことで、農業高校自体が変化していくと考えられる。まずは農業を志す入学者が増えるだろう。これは農業高校にとっていい変化の第一歩である。生徒が少しずつでも変わっていけば、授業の内容も変わってくる。そして産業別就職先で農業が少数派であるという現状も変化していくことが考えられる。担い手の増加は農業高校にとってだけではなく、日本にとってとてもうれしい変化である。

農ク全国大会で生き生きと農業について学んでいることを発表している姿を人々が見て、その様子が広まっていけば、農業高校のイメージや農業という産業へのマイナスイメージ

は払しょくされていくだろう。一般のイメージが変わることで、農業高校生であることに今以上の誇りを持てるようになるのではないか。

### (3) 子どもにとっての進路選択肢の増加

農業高校を目指したいと思う中学生が増えることが見込まれる。現在、農業高校には目立った全国大会がないため、農業高校のことを知ろうと考えた際に、自分でパンフレットを読んだり、オープンキャンパスに参加したりしないといけない状況だ。しかし、エンターテイメントとしての農ク全国大会が広まれば、農業高校という選択肢が自然とより多くの中学生に舞い込んでくることになる。これは彼らの固定概念を覆すことになるだろう。発表を見て農業高校ではどのようなことが行われているかを知ること、普通科しか考えていなかった生徒にも農業科という選択肢が増えることになる。進路選択の幅が広まるということは彼らにとっても有益なことであり、進学後のミスマッチを予防できるという期待もできる。

おわりに

農業高校の現状は明るいとはいえない。高校生の中のわずか2.7%。彼らには大学の農学部では行われない農業教育がなされている。農業にとって実際の作業は教科書で学ぶことよりも尊い価値がある。思っていたほど収量がなかった。台風にやられてしまった。獣害にやられた。教科書通りに農業はうまくいかない。そんな大事なことを彼らは高校時代に学んで卒業していく。しかし、多くの卒業生が、得た経験を卒業後に直接生かせない職業についているということは歯がゆいことだ。たとえ彼らがそう思っていなくても、大学で講義主体の農業を学んでいる筆者から見ればそうなのである。

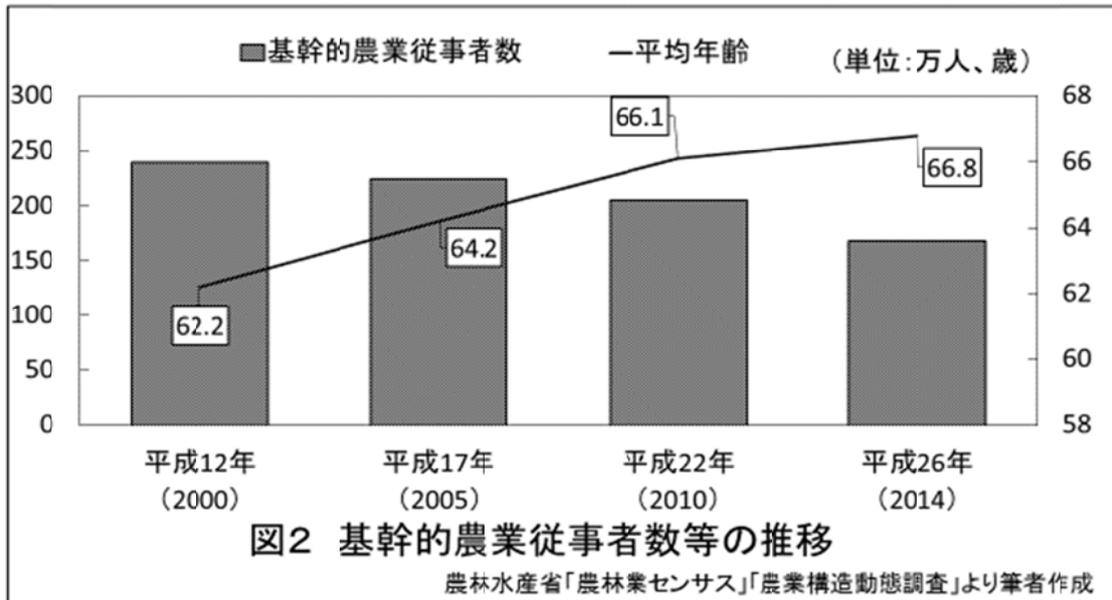
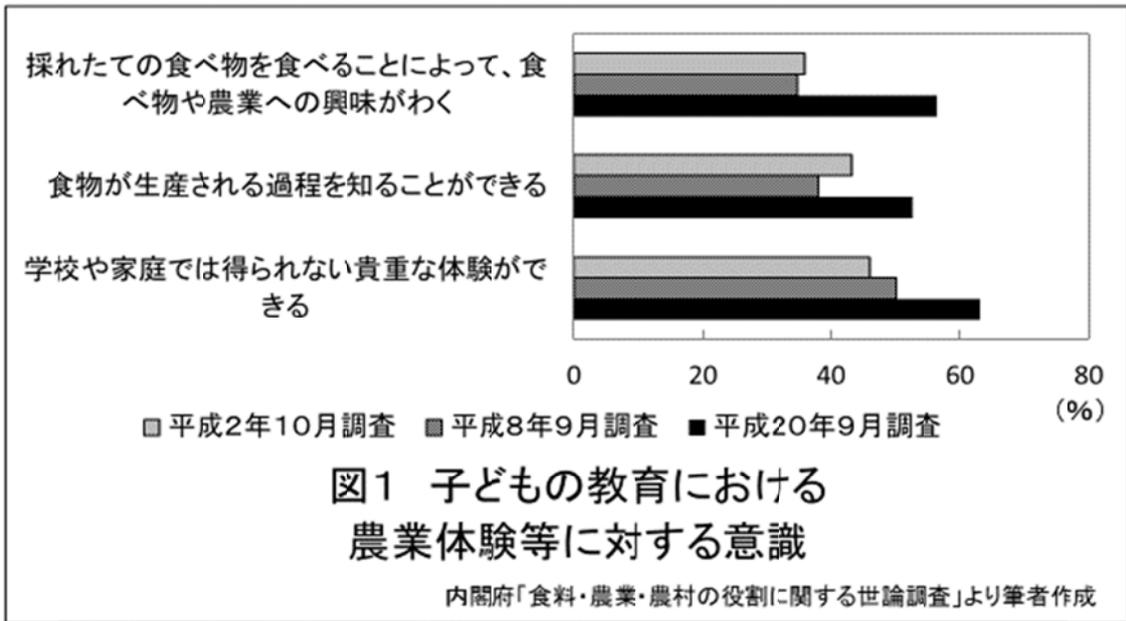
農業高校の見学の際に先生が仰っていた。『今の農業高校は「農業を教える」のではなく「農業で教える」という状況になっている』と。これは農業科目を通して、人間性や協調性などを育むということで、農業が教育のツールになってしまっているということである。

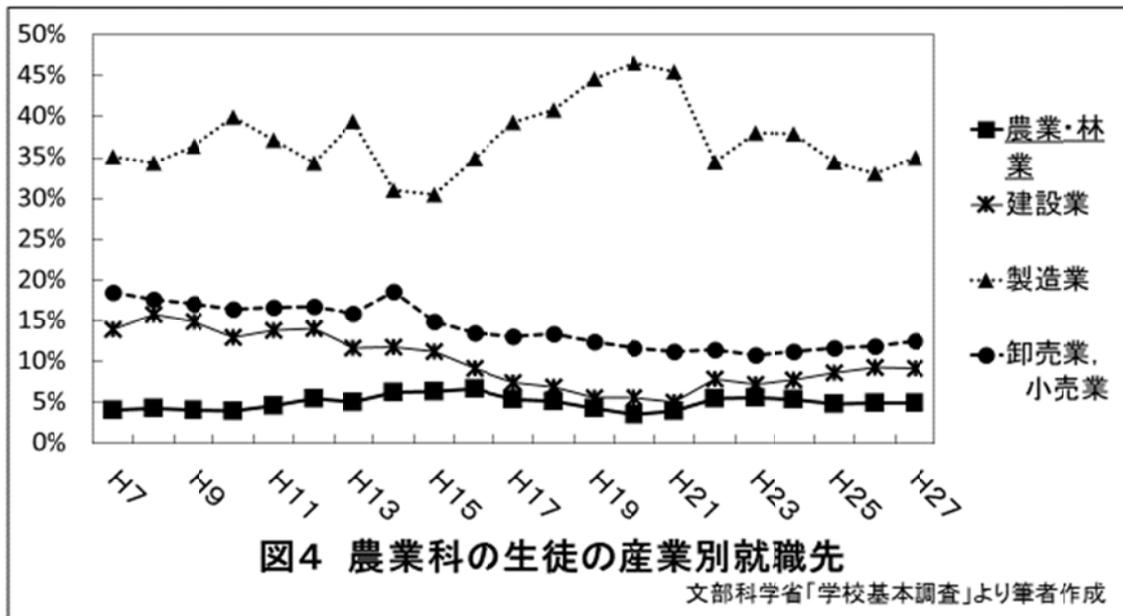
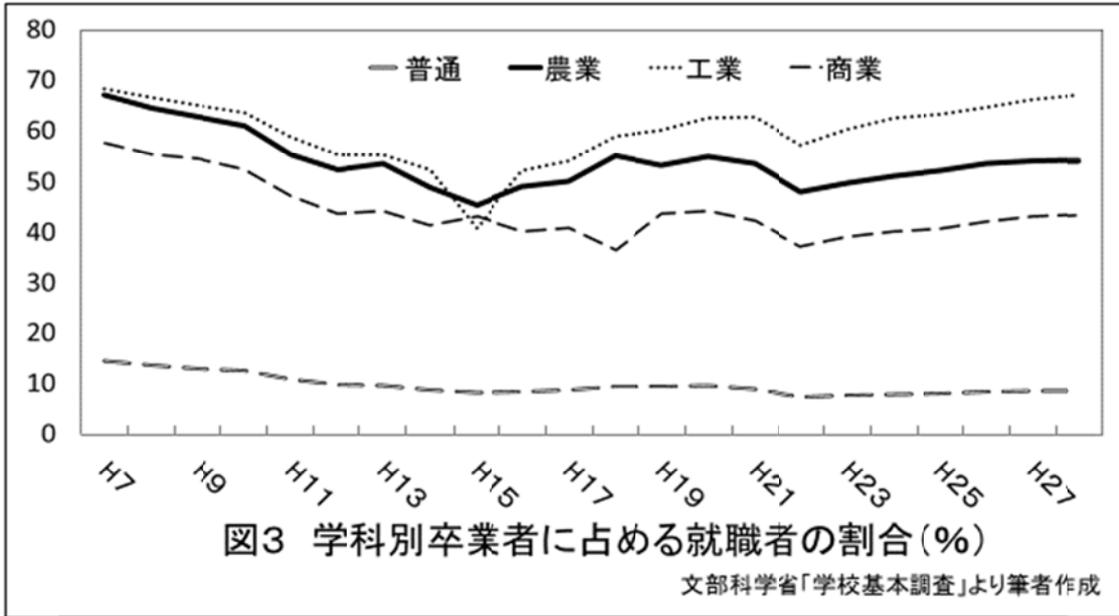
本来は農業を教え、農業で人を育て、農業を担っていくというのが農業高校のあるべき姿である。農クの全国大会をより夢のあるものにして、農業高校生や子どもたちが目指すべき場にするすることで、農業教育は再び本来のあり方へと導かれるだろう。

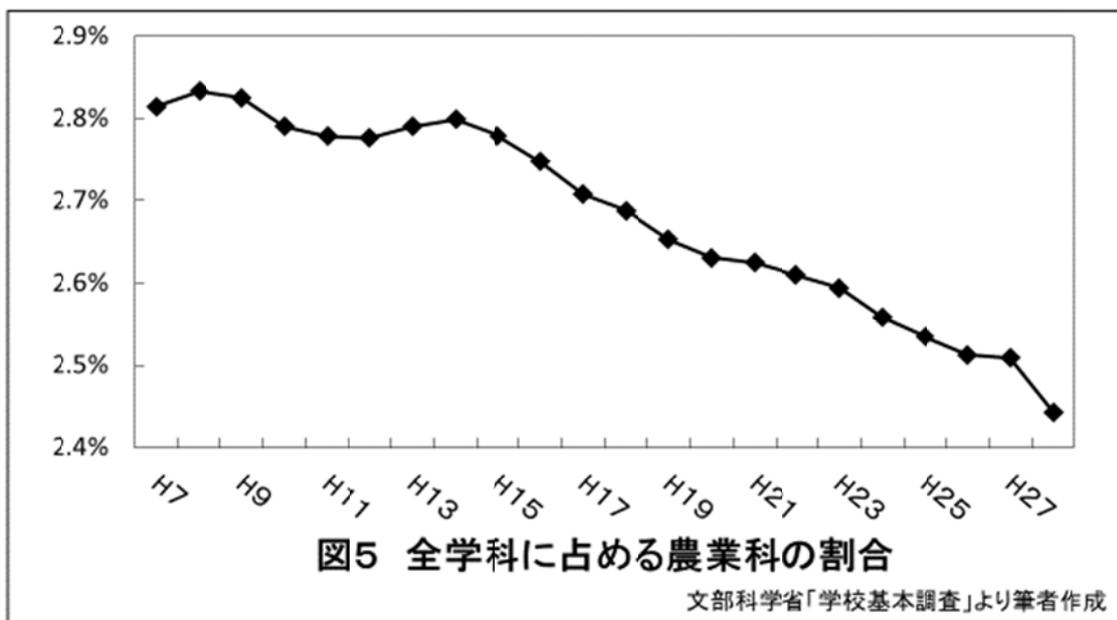
筆者は将来、農業を学び実践することが、多くの人にとっての選択肢として存在するような教育現場を作りたい。農業で学び、農業を学び、農業が変えるのだ。

### (謝辞)

今回論文を作成するにあたって、農業高校を見学させていただいたことは非常にいい経験となり、本論文の核になりました。見学させていただいた兵庫県立有馬高校ならびに兵庫県立篠山産業高校では農業高校の実情を教えてくださいました。農業高校で農業科の教師をしている父には筆者のささいな疑問を解決してもらいました。また、クミアイ化学工業さまには「日本の農業の未来を考える」をテーマに本コンクールを開催していただいたことで、農業の未来について考えるすばらしい機会をいただきました。最後になりましたが、ここで謝辞を表します。ありがとうございました。







参考文献リスト

農林水産省白書 H27 第4節多様な分野との連携による都市農村交流（取得日 H28 10月29日）

[http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h27/h27\\_h/trend/part1/chap3/c3\\_4\\_00.html](http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h27/h27_h/trend/part1/chap3/c3_4_00.html)

内閣府 食料・農業・農村の役割に関する世論調査（平成20年9月実施）（取得日 H28 10月29日）

<http://survey.gov-online.go.jp/h20/h20-shokuryou/index.html>

文部科学省 高等学校学科別生徒数・学校数（取得日 H28 10月29日）

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/shinkou/genjyo/021201.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/genjyo/021201.htm)

日本農業クラブ(取得日 H28 10月29日)

<http://www.natffj.org/>

文部科学省 学校基本調査

農林水産省「多様な担い手の育成・確保」

[http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h26/h26\\_h/trend/part2/t3\\_02.html](http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h26/h26_h/trend/part2/t3_02.html) (参照日十月六日)

農林水産省「食育の推進（平成25年度）」

[http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h25/h25\\_h/trend/part1/chap1/c1\\_3\\_02.html](http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h25/h25_h/trend/part1/chap1/c1_3_02.html) (参照日十月六日)

農林水産省「食育の推進（平成24年度）」

[http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h24\\_h/trend/part1/chap2/c2\\_3\\_03.html](http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h24_h/trend/part1/chap2/c2_3_03.html) (参照日十月六日)

内閣府 食育基本法